

評価から評定への総括方法

令和5年4月
江戸川区立南篠崎小学校

1 観点別学習状況の評価の観点ごとの総括

観点別学習状況の評価のための総括の場面として、

- (1) 単元（題材）における観点ごとの評価の総括、
- (2) 学期末における観点ごとの評価の総括、
- (3) 学年末における観点ごとの評価の総括をA B Cの3段階で行う。

(1) 単元（題材）における観点ごとの評価の総括

単元（題材）において、具体的な学習活動に即して設定したいくつかの「学習活動における具体的評価規準」ごとに評価を行い、観点ごとにそれらの評価結果を総括する。

総括の方法は、最も数の多い記号がその単元（題材）における学習状況を最もよく表しているとの考え方に立ち、例えば、評価規準の数が三つあり、それぞれの評価規準に照らして行った評価結果が「A, A, B」なら「A」と総括する。

ただし、評価規準に照らして行った評価結果が、例えば「A, A, B, B」のように「A」と「B」が同数となる場合で、「A」、「B」が同数であれば「A」と総括する考え方（「A, A, B, B」で「A」とする）が、同じ記号でも幅があるので、それがわかる場合には考慮する。

また、教科によって、指導のねらいや授業時数、評価方法等に応じて、評価規準に重みを付ける場合もある。この場合、「A, A, B, B」でも、前2つの評価規準に重みが置かれていれば、Aが過半数を占めているのと同じ状況を示すこととなる。

このほか、教科における学習活動や評価の観点の特性を踏まえ、学習の途中段階において行った評価結果や学習の最終段階において行った評価を重視して総括するようにする。

(2) 学期末における観点ごとの評価の総括

学期末における総括については、(1) で総括した単元（題材）における観点ごとの評価結果をもとに行う。

学期末における観点別学習状況の評価（「A, B, C」）を導く総括の方法としては、上記(1)と同様の考え方に立つ。

(3) 学年末における観点ごとの評価の総括

各学期末における評価結果をもとに行う。学年末における観点別学習状況の評価（「A, B, C」）を導く総括の方法としては、上記(1)と同様の考え方で行う。

☆「知識・技能」でCが1つでもあれば Aではなく、Bとする。

A	A	A	A	B	A	B	A	B	C
A	A	B	A	B	B	B	C	C	C
A	B	B	C	B	C	C	C	C	C
A	A又はB		B	B	B	B	B	B又はC	C

上記(1) から(3) の総括において、学習の最終段階の評価を重視する考え方については、それによって途中段階の評価がおろそかにならないようにする配慮をする。

2 観点別学習状況の評価の評定への総括

(1) 観点別学習状況と評定の表示

観点別学習状況については、現行の指導要録と同様、次のように3段階で評価する。

「十分満足できると判断されるもの」をA、

「おおむね満足できると判断されるもの」をB、

「努力を要すると判断されるもの」をC

また、評定については、3段階で評価する。

「十分満足できると判断されるもの」を3、

「おおむね満足できると判断されるもの」を2、

「努力を要すると判断されるもの」を1

(2) 観点別学習状況の評価の評定への総括の考え方

観点別学習状況の評価の評定への総括においては、3観点の重点の置き方にかかわらず、小学校については、3観点の評価（左から「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」）が「A, A, A」であれば「3」, 「B, B, B」であれば「2」, 「C, C, C」であれば「1」

評定への総括については、

学年末に総括した観点別学習状況の評価結果を総括し、評定とする。

各教科の学習活動の特質、評価の場面や評価規準、児童生徒の発達段階に応じて、ペーパーテスト、ワークシート、学習カード、観察、面接、質問紙、作品、ノート、レポートなどの様々な評価方法の中から、その場面における児童生徒の学習の状況を的確に評価できる方法を選択していく。

また、評価が学期末や学年末などに偏ることのないよう、評価の時期を工夫し、学習の過程における評価を一層重視するなど、評価の場面についても工夫を加える。

ペーパーテストについては、一般に、学習の実現状況を客観的に示すものとの受け止めがなされており、このことが、先に述べたように評価方法として、ペーパーテストを重視することにもつながっていると考えられる。

もちろん、ペーパーテストは、評価方法の一つとして有効であるが、ペーパーテストにおいて得られる結果が、目標に準拠した評価における学習の実現状況を直ちに表すものではないことについては、改めて認識する必要がある。

ペーパーテストにおける設問のねらいを明確にし、個々の問題を正答したのか、仮に正答に達しなかったとしてもどこまでの解答ができたのか、全体では何割の正答を得たのかといったことが、学習の実現状況と結び付いて解釈できるよう、問題内容を更に工夫改善することが求められる。

さらに、ペーパーテストについては、「知識・技能」の評価に偏ることなく、「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の評価も含め、児童生徒の資質や能力を多面的に把握できるようにしていくことが大切である。

☆「知識・技能」でCが1つでもあれば 3ではなく、2とする。

A	A	A	A	B	A	B	A	B	C
A	A	B	A	B	B	B	C	C	C
A	B	B	C	B	C	C	C	C	C
3		3又は2	2	2	2	2	2	2又は1	1